

原著論文

近代期の日本における福祉思想の社会構造史 (2)

—先行研究における史観の考察—

The Social Structural History of Ideas of Welfare in Japanese Modern Period (2) :

Consideration of Historical View in Prior Research

坪井 真

Makoto Tsuboi

【要約】

本稿は、社会福祉史の分野で多くの業績を残した吉田久一の先行研究から、福祉思想に関する主要な研究成果（吉田 1979・1989・2003）を取り上げ、史観を中心とした分析視座の特徴を考察した。その結果、吉田の研究成果は、宗教と福祉思想の関係性が重要であり、西洋と日本における文化的・社会的特徴が福祉思想の通時的特徴に影響を及ぼすという分析視点を示した。一方、史観は、マルクス（Marx, K. H.）とエンゲルス（Engels, F.）が確立した唯物史観を基盤としつつ、当初から下部構造と上部構造の相対性を重視している点が特徴であった。また、吉田はヴェーバー（Weber, M.）による理念型も論究しているが、宗教と福祉思想の関係性に着目した社会科学的な史観は検討課題として残されている。したがって、ヴェーバー（Weber, M.）による宗教的エートスを鍵概念に位置づけた史観を論究することが今後の研究課題である。

【キーワード】

福祉思想、近代期、社会構造史、史観、宗教的エートス

I. 問題の所在

本稿は、近代期の日本で進展した慈善事業・社会事業・戦時厚生事業の思想（以下「福祉思想」という）を研究対象¹⁾に位置づけ、その共時的特徴（同時代の文化的・社会的側面に影響を受けた福祉思想の特徴）と通時的特徴（時系列の推移で変容した福祉思想の特徴ならびに継承された福祉思想の特徴）を分析・考察し、現代の社会福祉に「先行するさまざまな諸条件」（田中 1990）の特徴や影響などを解明する研究²⁾の一環である。

近代期の福祉思想という歴史的事象を論究する場合、歴史学や歴史哲学は重要な関連分野である。このうち、第二次世界大戦後の歴史学研究は、その方法論が通時的に変容している。たとえば、1950 年代における歴史学研究（佐藤 1954：46-47）では、①研究者の歴史観、②歴史観に基づく問題設定、③史実の確認（手段）、④因果関係の構成（認識手段）、⑤研究対象の歴史的意義を把握するという方法論³⁾が提唱された。このうち、分析視座に該当する歴史観（以下「史観」という）は、①宗教史観（人間以上の力をもったものが人間のあり方を定めていくという見方）、②地理学的史観（人間を取り巻く自然現象・環境などが人間のあり方を決定するという見方）、③広義の人間史観（歴史は人間がつく

るものであるから、あくまでも人間の力によって決定されるという見方)に含まれる観念論史観やマルクス (Marx, K. H.) とエンゲルス (Engels, F.) が確立した唯物史観⁴⁾、④『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1920)に代表されるヴェーバー (Weber, M.) の「社会科学の方法論に基づく見方」⁵⁾ などがある。(酒井・石塚 2006: 46-53)

一方、1970年代以降の歴史学研究の分野では、従来の史観(唯物史観に基づく単系発展段階説や人民闘争説など)と異なる近代化の見方が論じられている。たとえば、近代日本研究の専門家である佐藤(1983: 12-13)は、近代化について「産業化を中軸部分として含む広汎な社会変動の過程であるが、その多岐にわたる変化に共通する基本的特性は、マックス・ウェーバーに従って、目的合理性という意味での合理化といえる。(中略)そして目的合理的態度の系統的採用こそ、近代社会の決定的特質なのである」と論じている。佐藤の議論は、唯物史観に内在する史的一元論(単系発展段階説など)よりもヴェーバー (Weber, M.) の史的多元論を重視した史観といえよう。

また、歴史哲学の方法論である「歴史の物語り論」(Danto, A. C.=1989)について、宮坂(2007: 169)は「過去の歴史を〈現在〉の視点から構成」する点が特徴であると論じている。宮坂(2007: 181)によれば、「勝義の物語り」として「歴史の基礎的事項に関して歴史学者が述べるもの」が「歴史の物語り論」であり、「日常の物語り」は「人々が日常生活の中で直接体験したこと」を語ることであるという。そして「『勝義の物語り』として常識となった歴史的知識は、その後われわれが『日常の物語り』を構成するときの基礎的視点を提供していく」と彼は指摘している。また、大塚(2007: 45)は「歴史の物語り論」における「歴史的出来事の実在性は、先行する真とされる歴史物語と整合する限りにおいてのみ認められる」と論じている。

以上の関連分野における議論は、歴史的事象を論究するうえで研究者の分析視座(特に史観)が重要であることを示唆しているのではないか。そこで本稿は、社会福祉史の分野で多くの業績を残した吉田久一の先行研究から、福祉思想に関する主要な研究成果(吉田 1979・1989・2003)を取り上げ、史観を中心とした分析視座の特徴を分析・考察する。

II. 分析結果と考察

1. 吉田久一(1979)『社会福祉と諸科学 1—社会事業理論の歴史』一粒社

本書において、吉田(1979: 6)は「総合的歴史認識をとる私は社会事業論は実態的社会科学に立脚しながら、実践を志向する主体的創造的視点をくみいれ、歴史的社会的実践としての社会事業の枠組を考えられないかというのが私の仮説である」と述べている。また、吉田(1979: 8)は「私が社会事業の枠組を歴史的社会的実践として把握するのは、社会事業に対して理論的関心よりも、その思想や意義により興味をもっている」という。一方、研究方法上の「思想」と「理論」について、吉田(1979: 25)は以下のとおり論じている。

まず、原初的価値評価とでもいうべき生活感情、(中略)次にそれは最も素朴な思想として、具体的問題に対する意見として深められる。しかし、それはまだ個人の意見であって、歴史的社会的なものではない。したがって、次の段階として、意見が歴史科学や社会科学を媒介として認識や世界観となる。そして、最後

に抽象化体系化された理論となる。社会事業思想の形成にはいろんな方法がありうるが、実践を前提におけば生活感情→意見→世界観→理論・学説の順序となると思う。

引用：吉田久一（1979：25）『社会福祉と諸科学 1—社会事業理論の歴史』一粒社。

上記の引用箇所を示された「生活感情→意見→世界観→理論・学説」という言説は、実践者の感情から思想形成という過程を経て「抽象化体系化された理論」を確立するという通時的な分析概念に位置づけられる。つまり、本書において吉田は、実践者の価値観・倫理観に立脚した社会事業・社会福祉分野の思想的特徴を「総合的歴史認識」（吉田 1979：6）に基づき論及している。その「総合的歴史認識」が本書における史観であり、分析視座の基盤といえよう。そこで本書における史観を分析したい。

本書において、吉田（1979：17）が史観を論じている箇所は以下のとおりである。

従来さまざまな史観があったが、社会事業史の場でいえば、唯物史観が最も科学的な法則であったことは否定できない。唯物史観については、マルクスが『経済学批判』（1859）「序文」で説く通りである。

しかし、唯物史観は科学的法則であるといっても、今日では多くの点を加えねばならないし、特に社会事業史にそのことがいえる。例えば下部構造と上部構造の関係でも、下部構造の理論的精密化が要求されている。事実社会事業史では上部の精神的・倫理的動因が、しばしば下部構造の方向づけをしたので、その相対的重視が必要である。また社会事業では生活、特に人間等を扱うことが多いので、その個別状況と全体的状況との関係づけも考えなければならない。社会事業史研究に唯物史観は中心的地位を持つが、その他の諸法則にも副次的地位を与えつつ、構成体的に理解して行かなければ、多様な社会事業史の究明はできない。

引用：吉田久一（1979：17）『社会福祉と諸科学 1—社会事業理論の歴史』一粒社。

この引用箇所からも理解できるとおり、本書における吉田の史観は、マルクス（Marx, K. H.）とエンゲルス（Engels, F.）が確立した唯物史観を「社会事業史研究」の「中心的地位」に位置づけている。

周知のとおり、唯物史観の定式（Marx, K. H.=1926:57）では「上部構造（社会的、政治的、および精神的の生活過程一般）」に対する「下部構造（物質的生活の生産方法）」の制約という不可逆的な特徴を示している。一方、本書において吉田（1979：17）は「社会事業史では上部の精神的・倫理的動因が、しばしば下部構造の方向づけをしたので、その相対的重視が必要である」と述べ、「唯物史観は中心的地位を持つが、その他の諸法則にも副次的地位を与えつつ、構成体的に理解して行かなければ、多様な社会事業史の究明はできない」と論じている。

つまり、「社会の経済的構造」に影響を及ぼす上部構造の「精神的・倫理的動因」は、唯物史観と異なる「その他の諸法則」を示唆する概念といえよう。換言するならば、吉田の史観には「副次的地位」である「その他の諸法則」として、既述した宗教史観（人間以上の力をもったものが人間のあり方を定めていくという見方）や唯物史観と異なる人間史観（観念論史観や人生論史観など）の特徴も包含しているのではないか。

そこで本書の構成と各章における吉田の考察部分を分析する。まず、第一章『慈善救済事業の系譜』で吉田（1979：30）は「ヨーロッパの近代社会事業の前段階」と「日本社会事業の前段階」の相違点（前者が「キリスト教的宗教的慈善」であるのに対し、後者は「儒

教的倫理慈恵」である)を示し、日本における「慈善」の概念規定が不明確である点を指摘している。そのうえで第一章は「仏教的慈善思想」「キリスト教慈善思想」「儒教的慈善思想」「その他の日本救済慈善思想」を論じており、上部構造の「精神的・倫理的動因」を重視した内容といえよう。

一方、第三章『近代国家成立期の慈善救済思想』第一節の『初期下層社会の報告』にみられる「資本主義的貧困の発生」や「原始蓄積過程」という言説(吉田 1979: 76-79)は、唯物史観を「中心的地位」に位置づけた吉田の史観を示している。

このように本書は、社会事業の思想・理論が唯物史観の定式と異なる特徴で論究する重要性を示唆している。換言するならば、マルクス (Marx, K. H.=1926: 57) が示した下部構造の「社会の経済的構造」と「法律的及び政治的の上部構造」、そして「特定の社会的意識諸形態」の相互連関が本書の史観を特徴づけているといえよう。

2. 吉田久一 (1989)『吉田久一著作集 1—日本社会福祉思想史』川島書店

本書は、第一章『日本福祉思想の発生と古代律令救済制度』から第十一章『高度成長、低成長期の社会福祉思想』までの幅広い期間を網羅した構成となっている。とりわけ、前出の『社会福祉と諸科学 1—社会事業理論の歴史』(吉田 1979)と比べて、近世以前の「社会福祉思想」の記述が多い。吉田 (1989: 4)によれば「日本福祉の特徴は実践にあって、古代神話、中世鎌倉仏教、近世陽明学、そして近代の留岡幸助以下、その福祉思想は社会的認識というより、実践の中で育成された」という。よって、本書においても吉田は思想形成の基点を「実践」に位置づけていることが理解できる。

一方、近代以降の社会福祉について、吉田 (1989: 5)は「社会福祉がその立脚点を歴史社会に置く以上、その相対性を承認することが自然である。したがって、社会福祉を労働政策等と並立させ、相互補完とは考えにくい」と述べ、「社会福祉は資本主義という社会制度の中にある、その社会の矛盾が生み出す社会問題、特に生活問題、さらに加えて精神不安、そこから生まれるニーズの解決や克服に、相対的独自の役割を持って当たる、社会的歴史的实践」であると論じている。

さらに吉田 (1989: 9-10)は「社会福祉思想史も広い意味では、社会思想史の一環である」と論じ、福祉思想の選択基準を以下のとおり位置づけた。

- ①歴史的社会的ジェネラリティに立ちながら、福祉実践にその思想がどれだけ浸透しているかという、ジェネラリティと浸透度。
- ②思想は思想としての体系化が望ましいが、しかし社会福祉従事者に、方法論の厳密性を求めることは困難な場合が多い。無論、原初的感情の放恣や、思想の状況内閉塞は取ることはできないが、逆に理論的密度が濃厚であっても、社会的歴史性が失われ、孤立状況にある思想もある。社会福祉思想の注目点はその実践がどれだけ論理的に「思想化」されたかにある。
- ③海外からの影響が多い日本社会福祉は、重層的というより雑居的になりがちである。したがってこの導入に対決があったかどうかとい点が見所である。また日本の社会福祉思想は、主体性を喪失し、時代の変化の中で、浮かんでは消滅しがちである。そこに持続性が問われる。

吉田久一 (1989: 9-10)『吉田久一著作集 1—日本社会福祉思想史』川島書店。

この「社会福祉思想の選択基準」は、福祉思想史研究における吉田の問題設定と理解できる。では、その基盤となる史観は、どのような特徴を有しているのだろうか。前出の研究成果（吉田 1979）と異なり、本書には「史観」を明記した箇所がなく、吉田は「歴史的連関」という項目で以下のとおり記している。

日本の社会福祉研究者は、意識無意識を問わず、マルクスによって個別的な多様な歴史的事実を関連づけ、総体的に考察する方法を学び、その歴史社会を動かして行く基本法則を学んだ。（中略）この唯物史観は大筋で認めるとしても、思想の経済社会に対する相対的独立、思想は社会的基盤によって育まれ支えられるとしても、その経済的基盤に還元され得ない人間の自発性や自由等は、その基盤からの相対的独立として認められないのか。また思想は単なる下部への「照り返し」にすぎないのか。それを考察する際、もう一人の巨人ウェーバーの類型や理念型が問題となる。（中略）この理念型は、欧米先進国の社会福祉の近代化理論には重要であるが、日本社会福祉思想史の作業には直ちに使用はできなかった。しかしここでの考察対象である下部と上部の歴史的連関に、大塚（筆者注：大塚久雄）の指摘する「理念によって作られた『世界像』」が、しばしば社会福祉思想の歴史に「転轍手」の役割を果たした事例もしばしば見える。

吉田久一（1989：10-11）『吉田久一著作集 1—日本社会福祉思想史』川島書店。

この言説から理解できるとおり、本書において吉田は、唯物史観を重視しつつも「人間の自発性や自由等」が「経済的基盤」（下部構造）に還元されないのではないかと論じ、下部構造に対する「人間の自発性や自由等」の相対的独立という史観を示している。さらに吉田は、ヴェーバー（Weber, M.）が示した理念型^{6）}を応用する可能性にも言及している。つまり、本書では、唯物史観の基盤である下部構造と上部構造・社会的意識諸形態の関係性にとらわれず、「人間の自発性や自由等」の通時的・共時的独立性を重視する史観に変容したといえよう。そして、ヴェーバー（Weber, M.）の理念型に着目していることから、本書における吉田の史観は、前出の酒井・石塚（2006：46-53）が示した「社会科学の方法論に基づく見方」も包含している蓋然性が高い。

また、吉田（1989：15）は「村落共同体やそこでの代表者意識としての福祉思想が、いかに人類的な社会共同体に昇華するか」という福祉思想の問題を提示している。この問題提示は「人間の自発性や自由等」を重視する吉田の史観が反映されているだけでなく、先に筆者（坪井 2020）が分析・考察した社会福祉の「さまざまな諸条件」、すなわち、①社会や人びとの間に広く普及している社会福祉の価値観・倫理観（「ある倫理」や「社会道徳」）、②社会福祉の目的概念・政策理念や実践者の価値観・倫理観（「あるべき倫理」や「人類道徳」）、③人びとの「慣習倫理」から「反省倫理」の変容過程に及ぼす政策の影響などの思想的特徴と通底しているのではないかと考える。

本書の第十一章『高度成長、低成長期の社会福祉思想』において、吉田（1989：593-594）は「現在社会福祉の社会科学」が「衰退し、これに代わって社会福祉の人間的価値や思想が、社会福祉を支えるものとして重視されている」と述べ、「その時の政策や、現状埋没になりがちな福祉倫理などより、社会科学と鋭く対立し、しかも社会福祉の社会科学を取り戻すための強靱な精神を提供し、福祉価値を創造する『輪転』手の役割を、宗教福祉思想に望みの一つを托している」と締め括っている。

では、宗教福祉思想の研究について、吉田は、どのような史観と問題設定に基づき論究

しているのだろうか。次に分析する先行研究の成果と課題をとおして、宗教福祉思想に対する吉田の分析視座を考察する。

3. 吉田久一（2003）『社会福祉と日本の宗教思想—仏教・儒教・キリスト教の福祉思想—』勁草書房

本書の執筆意図について、吉田（2003：3）は「日本でも従来から仏教福祉思想史や、キリスト教福祉思想史の先行研究に恵まれている。しかし研究はおおむね個別研究に終り、儒教的福祉思想史を含めて、総合的に日本社会福祉思想史に果たした宗教の役割は明らかにされてこなかった」ことを挙げている。また、吉田（2003：2）は社会福祉と宗教思想の関係性を以下のとおり述べている。

西欧では政治や経済の発展とともに、内面的にそれを支えるギリシャ的「博愛」と、キリスト教的「隣人愛」が対峙しながら、西欧社会福祉を「連続」してきた。日本でも古代・中世は仏教的「慈悲」、近世では儒教的「仁愛」や「仁政」、明治時代はキリスト教的「慈善事業」がその「開拓」的役割を果たしたが、政策を支える内面的役割を担うエートスに乏しく、社会福祉の「不連続」性は否定しがたい。

引用：吉田久一（2003：2）『社会福祉と日本の宗教思想—仏教・儒教・キリスト教の福祉思想—』勁草書房。

引用した吉田の議論は、本書の分析視座における問題設定と理解できる。では、本書における吉田の史観は、どのような特徴を有しているのだろうか。前出の『吉田久一著作集1—日本社会福祉思想史』（吉田 1989）と同様、本書にも史観を明記する箇所はない。そこで問題設定と理解できる上記の引用箇所（吉田 2003：2）を手がかりに序章『現代社会福祉と宗教思想』第4節『「社会福祉改革」について—その思想史—』の『「連続」と「不連続」』という箇所（吉田 2003：44-45）を引用する。

「連続」と「不連続」 西洋社会事業史と明治以降の日本社会事業史を比較して、直ちに気がつくのは、西洋社会事業史には「連続」性が濃厚であり、日本のそれには稀薄なことである（ただし明治以前の仏教福祉や儒教福祉を除く）。むしろ「連続」は単なる相対主義的な「模倣」や、「リアクション」ではなく、変革を伴う。例えばヨーロッパの中世カリタスが、宗教改革によって「禁欲」や「緊張」をてこに内面改革し、新しい「世俗性」を生み、「博愛」が生れる如きである。日本では米騒動後の社会状況や大正デモクラシーに牽引され、「連続性」の条件を整いながら、その大正社会事業も僅々二〇数年で戦争下に破産した。（中略）

遅れて近代化に出発した日本社会福祉は、その改革のために絶えず「目的」的な理想型として先進的モデルが必要であった。しかしそのモデルを単なる「移入」的存在としないために、長い福祉思想の歴史をもつ日本文化との交渉変革によって、はじめてその改革が可能になるはずである。現在の改革が「普遍」性を獲得するために、日本文化に育てられた先人達の経験努力をいかに変革しながら「継続」を可能にするのかが問われる。そのためには幕末洋学者達が行ったように「腑分け」しつつ変革を行うことが必要である。

結論からいえば、まず福祉への「個」のアイデンティティの定着の努力が重要である。その上に未熟な「福祉国家」を清算し、「福祉社会」の建設を目的としなければならない。その際、宗教思想が役割の一つを果たすと思う。

引用：吉田久一（2003：44-45）『社会福祉と日本の宗教思想—仏教・儒教・キリスト教の福祉思想—』勁草書房。

上記の引用箇所（2003:44-45）に基づき、本書の史観を分析するならば、マルクス（Marx, K. H.=1926: 57）が示した唯物史観を構成する下部構造（社会の経済的構造）と「法律的及び政治的の上部構造」の関係性、下部構造（社会の経済的構造）と「特定の社会的意識諸形態」の関係性という定式は明示されていない。一方、吉田は「連続」「不連続」「変革」という観点に基づき、西洋社会事業史と日本社会事業史における福祉思想の特徴を比較考察している。つまり、西洋と日本の文化的・社会的特徴が福祉思想の通時的特徴に影響を及ぼしているのではないかという問題設定が本書に通底しており、唯物史観と異なる特徴といえよう。

また、唯物史観が「特定の社会的意識諸形態」に位置づける宗教は、本書の鍵概念である。既述したとおり、歴史学研究（酒井・石塚 2006: 46-53）における宗教史観は「人間以上の力をもったものが人間のあり方を定めていくという見方」とされるが、宗教に関する本書の史観は異なる特徴を示している。具体的には《宗教と福祉思想の関係性》および《宗教と「法律的及び政治的の上部構造」の関係性》が重視されている。唯物史観の定式に基づくならば、《宗教と福祉思想の関係性》は「特定の社会的意識諸形態」内における相互作用であり、《宗教と「法律的及び政治的の上部構造」の関係性》は、「特定の社会的意識諸形態」に属する宗教と「法律的及び政治的の上部構造」の相互作用に位置づけられる。

この特徴は、吉田（1989）が着目していたヴェーバー（Weber, M.）による「社会科学の方法論に基づく見方」（酒井・石塚 2006: 46-53）と共通する史観が内在しているのではない。よって、本書における吉田の史観は、①唯物史観の定式と異なる《宗教と福祉思想の関係性》および《宗教と「法律的及び政治的の上部構造」の関係性》を重視した共時的特徴、②西洋と日本の文化的・社会的特徴が福祉思想の通時的特徴に影響を及ぼしているのではないかという問題設定が特徴に位置づけられる。

このような分析視座（史観および史観に基づく問題設定）に基づき、吉田は、《宗教と福祉思想の関係性》と《宗教と「法律的及び政治的の上部構造」の関係性》を多種多様な側面から分析し、人びとの信仰が社会事業実践や社会改革運動の「動因」になっていたことを考察している。彼の議論は、本研究（坪井 2020）が明らかにした社会福祉における「さまざまな諸条件」、すなわち、①社会や人びとの間に広く普及している社会福祉の価値観・倫理観（「ある倫理」や「社会道徳」）、②社会福祉の目的概念・政策理念や実践者の価値観・倫理観（「あるべき倫理」や「人類道徳」）、③人びとの「慣習倫理」から「反省倫理」の変容過程に及ぼす政策の影響などに宗教が重要な要因であることを示唆しているといえよう。

Ⅲ. 結論

本稿は、社会福祉史の分野で多くの業績を残した吉田久一の先行研究から、福祉思想に関する主要な研究成果（吉田 1979・1989・2003）を取り上げ、史観を中心とした分析視座の特徴を考察した。その結果、吉田の先行研究に内在する史観は、通時的に変容していたことが解明された。具体的には以下のとおりである。

まず『社会福祉と諸科学 1—社会事業理論の歴史』（吉田 1979）において、吉田は唯物史観を「社会事業史研究」の「中心的地位」に位置づけている。一方、唯物史観の定式と

異なり、下部構造の「社会の経済的構造」と「法律的及び政治的の上部構造」や「特定の社会的意識諸形態」の相互連関を重視する史観も提唱している。

『吉田久一著作集 1—日本社会福祉思想史』（吉田 1989）では、唯物史観の基盤である下部構造と上部構造・社会的意識諸形態の関係性にとらわれず、「人間の自発性や自由等」の通時的・共時的独立性を重視する史観に変容した。そして、ヴェーバー（Weber, M.）の理念型に着目していることから、本書における吉田の史観は「社会科学の方法論に基づく見方」（酒井・石塚 2006）も包含している蓋然性が高い。

そして『社会福祉と日本の宗教思想—仏教・儒教・キリスト教の福祉思想—』（吉田 2003）の史観は、①唯物史観の定式と異なる《宗教と福祉思想の関係性》および《宗教と「法律的及び政治的の上部構造」の関係性》を重視した共時的特徴、②西洋と日本の文化的・社会的特徴が福祉思想の通時的特徴に影響を及ぼしているのではないかという問題設定が特徴である。

このように吉田（1979・1989・2003）の研究成果は、宗教と福祉思想の関係性が重要であり、西洋と日本における文化的・社会的特徴が福祉思想の通時的特徴に影響を及ぼすという分析視点を示した。一方、史観については、唯物史観を基盤としつつ、当初から下部構造と上部構造の相対性を重視し、「社会科学の方法論に基づく見方」と関連するヴェーバー（Weber, M.）の理念型を論究しているが、社会科学的な史観の検討は今後の課題として残されている。よって、近代期の日本における福祉思想と宗教の関係性および西洋社会と日本社会の福祉思想形成と文化的・社会的特徴を共時的・通時的側面から論究するため、ヴェーバー（Weber, M.）による「宗教的エートス」すなわち「ある種の倫理が人々の内面に血肉化し、それが半ば無意識的に人々を特定の行動様式や生活様式へと駆り立てるような起動力」（岩井 1994）を鍵概念に位置づけた史観を論究することが今後の研究課題といえよう。

注

- 1) 先に筆者（坪井 2020）は、ベルクソン（Bergson, H.=2001）とデューイ（Dewey, J.=2002）が提唱した倫理学的概念（前者の「社会道德」・「人類道德」、後者の「慣習倫理」・「反省倫理」）や社会倫理学者の村田（2005）が提唱した社会倫理の概念（「ある倫理」・「あるべき倫理」）などに基づき、現代日本の社会福祉概念と政策理念を分析・考察した。その結果、現代の社会福祉における「さまざまな諸条件」は、①社会や人びとの間に広く普及している社会福祉の価値観・倫理観（「ある倫理」や「社会道德」）、②社会福祉の目的概念・政策理念や実践者の価値観・倫理観（「あるべき倫理」や「人類道德」）、③人びとの「慣習倫理」から「反省倫理」の変容過程に及ぼす政策の影響などの思想的特徴が鍵概念であることを解明し、下記（注2）のとおり、現代日本の社会福祉に「先行するさまざまな諸条件」のうち、近代期の福祉思想を研究対象に位置づけた。
- 2) 政治思想の研究者である田中（1990：94）によれば「歴史の発展と社会の変化はすべてなんらかの形でそれに先行するさまざまな諸条件に規定されて動き（原因）、その結果としてそれぞれの『現在』がある」という。したがって、現代日本の社会福祉も「先行するさまざまな諸条件」に影響を受けている蓋然性が高い。そこで本研究は、現代日本に先行する近代期の慈善事業・社会事業・戦時厚生事業を共時的・通時的側面から分析・考察する。また、本研究は「個々の事件や人物よりも、『諸関係』や『諸状況』、個人を越えた発展や過程を重視」し、「通時的な観点と共時的な観点とを複合させながら、考察対象となる現実の諸契機がそれぞれ因果的、機能的にどのような対応関係にあるのか」を分析・考察する社会構造史（Kocka, J.=2000：128・241）

を方法論の基盤に位置づける。

- 3) 歴史学者の佐藤（1954:46-47）によれば「歴史研究は何らかの具体的な問題を取上げること」から始まり「問題設定には必ずや何らかの視覚・立場が用意されなければならない。（中略）立場とは、そもそも歴史とは何か、われわれは歴史を如何に見るかという原理的な問題であり、いわゆる歴史観である（歴史現象に関する諸々の原理的な問題について、体系的理論構成がなされたとき、それは史学理論の名でよばれる）。従って何らかの歴史観に立つて行われる問題設定とは当然実証的方法以前の問題」であり、「歴史的意義の把握こそ歴史学の究極目的であって、因果関連の構成はその認識手段であり、史実の確認はさらにその手段である」という。（筆者注：原文を当用漢字に変更）
- 4) 唯物史観の特徴は 1859 年にマルクス（Marx, K. H.）が発表した『経済学批判』の「序文」に示されている。唯物史観の簡潔な定式（特に「下部構造」と「上部構造」）が記された『経済学批判』の「序文」（Marx, K. H.=1926: 57）は次のとおりである。「人々は、その生活の社会的生産において、特定の、必然的な、彼等の意思に依存せざる諸関係を結び、この生産関係は、彼等の物質的生産力の特定の発達段階に应当するものである。これらの生産関係の総体は、社会の経済的構造（筆者注：「下部構造」）を形づくり、これが実在的の基礎であって、その基礎の上に法律的及び政治的上部構造が立ち、その基礎に相応して特定の社会的意識諸形態（筆者注：哲学・宗教・芸術・道徳など）がある。物質的生活の生産方法は、社会的、政治的、および精神的の生活過程一般を制約する。人々の意識が彼等の存在を決定するのではなく、寧ろ反対に、彼等の社会的存在が彼等の意識を決定するのである。」（筆者注：原文を当用漢字に変更）
- 5) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を翻訳した大塚（1989:378）によれば、ヴェーバー（Weber, M.）は「歴史の流れのなかにみられる諸宗教と社会諸層の間の牽引と反撥の関係、そしてその度合いを、さまざまな内的ならびに外的諸利害を介して、多面的にとらえていこう」という「史的多元論」に基づき論究したという。このようにヴェーバー（Weber, M.）は、マルクス（Marx, K., H.）の唯物史観（その基底にある史的一元論）と異なり、「世界史の基本法則」は認めなかった。（大塚 1989：408・410）
- 6) 宗教社会学者の岩井（1994：21-22）によれば、ヴェーバー（Weber, M.）が考案した「理念型」（Idealypus）は、概念が「無限の多様性をもつ現実を一面的にしかとらえられない」という前提に基づき、「多様な現実の中の諸特性から、主観的な価値や関心に従って、ある部分を『知るに値するもの』として選択し、それを研究者の観点に沿って論理的に矛盾のないように構成したモデル」をいう。ヴェーバー（Weber, M. = 1989：141）は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において「宗教的信仰および宗教生活の実践のうちから生み出されて、個々人の生活態度に方向と基礎をあたえるような心理的起動力をば明らかにすること」を重視しており、その「考察の方法としては、宗教的思想を、現実の歴史には稀にしか見ることができないような、『理念型』として整合的に構成された姿で提示するよりほかはない。けだし、現実の歴史の中では明瞭な境界線を引きえないからこそ、むしろ徹底的に整合的な形態を探究することによって、はじめてその独自の影響の解明を期待しうるからだ」と論じている。そして、引用箇所に記載された「心理的起動力」と「理念型」を連関する概念が「エートス」である。岩井（1994：24・29）は「エートス」を「ある種の倫理が人々の内面に血肉化し、それが半ば無意識的に人々を特定の行動様式や生活様式へと駆り立てるような起動力」とであると論じ、ヴェーバー（Weber, M.）による「宗教経済倫理」（世俗内的禁欲など）は「人々を経済行為へと向かわせる起動力としての宗教的エートス」とであると述べている。

文献

- Bergson, Henri (1932) Les deux sources de la morale et de la religion. (= 2001, アンリ・ベルクソン著, 中村雄二郎訳「道徳と宗教の二源泉」白水社)

- Dewey, John & Tufts, James H. (1932) *Ethics* (= 2002, ジョン・デューイ, ジェイムズ・ハイデン・タフツ著, 河村望訳「デューイ＝ミード著作集 10 倫理学」人間の科学社)
- 岩井洋 (1994) 「宗教社会学の源流—ウェーバーとデュルケムを中心に—」井上順孝編『現代日本の宗教社会学』世界思想社.
- Kocka, Jürgen (1986) *Sozialgeschichte. Begriff-Entwicklung-Probleme*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen. (= 2000, ユルゲン・コッカ著, 仲内英三・土井美德訳「社会史とは何か—その方法と軌跡—」日本経済評論社)
- Marx, Karl Heinrich (1859) *Zur Kritik der politischen Ökonomie. Internationale Bibliothek*, 30, Verlag von J. H. M. Dietz, 1909. (= 1926, カール・マルクス著, 猪俣津南雄訳「経済学批判」新潮社)
- 宮坂和男 (2008) 「日本の歴史哲学の現況」『人間環境学研究』6 (10), 169-185.
- 村田充八 (2005) 『社会的エートスと社会倫理 (阪南大学叢書 74)』晃洋書房.
- 大塚良貴 (2006) 「歴史的出来事の実在性をどう考えるか—A・C・ダントーにおける歴史の物語り論の検討—」『待兼山論叢. 哲学編』40, 33-49.
- 酒井三郎・石塚正英 (2006) 「第一部 史学概論講義」石塚正英編『歴史研究の基本』北樹出版.
- 佐藤誠三郎 (1983) 「序説 近代日本をどうみるか」中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門 [増補版]』東京大学出版会.
- 佐藤進一 (1954) 「研究法」遠山茂樹・佐藤進一編『日本史研究入門 I』東京大学出版会.
- 田中浩 (1990) 『国家と個人』岩波書店.
- 坪井真 (2020) 「近代期の日本における福祉思想の社会構造史(1)—研究序説—」『作大論集』10, 139-150.
- Weber, Max (1920) *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd.I*, Tübingen (Mohr Siebeck) S. 17-206. (= 1989, マックス・ヴェーバー著, 大塚久雄訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」岩波文庫, 白 209-3, 岩波書店)
- 吉田久一 (1979) 『社会福祉と諸科学 1—社会事業理論の歴史』一粒社.
- 吉田久一 (1989) 『吉田久一著作集 1—日本社会福祉思想史』川島書店.
- 吉田久一 (2003) 『社会福祉と日本の宗教思想—仏教・儒教・キリスト教の福祉思想—』勁草書房.